

明治大正の世相とことば

槌田満文

はじめに

このところ、明治大正の世相と文学のかかわりについて調べる機会が多い。特に、文学作品における新語・流行語・風俗語の問題に関心を持ちつづけている。「明治大正の世相とことば」というテーマで、考えたところをまとめてみることにしたい。

俗に「歌は世につれ、世は歌につれ」という。同様に、新語・流行語は世相・風俗から生まれ、世相・風俗は新語・流行語とともに変わってゆくこともたしかであろう。

たとえば「ザンギリ頭」は文明開化のシンボル語であった。「壮士」という呼び名は、明治十年代の自由民権運動と深く結びついている。明治二十二年の憲法発布や二十三年の国会開設の機運が「帝國」の語をはやらせ、三十年代には日露の風雲とからんで「恐露病」が発生した。「新しい女」は明治末期の婦人解放運動とともに登場し、大正デモクラシーの高揚は普通選挙略して「普選」を実現させている。世相・風俗に、新語・流行語は深くかかわっているといっ

てよい。

明治大正の世相・風俗の推移をたどってみると、そこには西欧の近代文化から受けた影響のあとが目立つ。むしろ、百年にわたる歴史の動きは、欧化を積極的に進めた西洋志向期と、そのリアクションとしての伝統志向期の両極運動と把握するのが、実態に即した見方ではなからうか。

近代日本の世相史は、近代化を外向的に推進したいわば前向きな西洋志向期と、内向的に日本回帰をはかった後ろ向きな伝統志向期のサイクルが、スパイラル（螺旋状）に展開してきたとみられる。

開化期から民権期につづく明治十年代までの第一次西洋志向期には、外国語とともに訳語としての漢語が流行し、言文一致という新文体が創出された。

欧化熱への反省から復古的な風潮が強くなった明治二十年代の第一次伝統志向期には、元禄文学再発見などの影響もあって、新しい雅俗折衷体が大勢を占めている。

日清戦争につづく日露戦争に對外的なエネルギーが費された明治三十年代は、ロマン主義、自然主義、社会主義などの新思潮を次々

に採り入れた第二次西洋志向期であった。言文一致体が定着を見た時期でもある。

大逆事件以後いわゆる「冬の時代」に入った明治末期から大正初年にかけての第二次伝統志向期は、新旧用語の交替期とみるべきであらう。

第一次世界大戦とロシア革命の影響を受けて、大正デモクラシーから昭和初頭のプロレタリア文学へ発展する第三次西洋志向期は、多くのモダン語辞典が刊行された外来語の急増期であった。

昭和六年の満州事変から第二次世界大戦にいたる軍国主義時代の第三次伝統志向期は、野球用語まで追放された外来語受難期であり、一転して「第二の開国」と呼ばれる戦後民主主義の第四次西洋志向期は、カタカナことばが目立つ外国語の氾濫時代となっている。

明治時代はそれまでのどの時代よりも語彙の変化が激しかった。また、増えた単語としては明治時代に漢語、大正以後に外来語が多い。外来語増加のピークは明治期、大正・昭和期、終戦後の三期とされている(石綿敏雄「現代の語彙」昭和46年)が、いずれも前述の西洋志向期と重なるのは、当然の現象であらう。

明治大正の新語には、永く鮮度を保つことができず、明治初年の「岡蒸汽」「因循家」、十年代の「非職」「紳商」のように、消えたり別なことばに変わったりした廃語も少なくない。明治二十五年に五代目尾上菊五郎が「塩原多助」で使った上州方言の「がんす」、三十三年からはやった「ストライキ節」の「てなこと、おっしやいましたかね」のような流行語の場合、その衰滅のテンポは一段と早まる。

しかし、新語が「温泉」「演説」「欽毒」「サボる」などのように、日常語に組み込まれていったケースも少なくない。また、鹿鳴館時代の「夜会結び」、活動写真勃興期の「ジゴマ」のように、ある時期の世相を鮮明に反映した風俗語も多いといえる。

世相を示すこれらの新語・流行語・風俗語を、時代の流れに沿って考えてみたい。

1

江戸が東京と変わった新時代の世相は、「文明開化」を「囃し言葉」にして採用された西欧文明の所産に彩られている。特に明治十年ごろまで、第一次西洋志向期の前半に当たる期間には、衣食住など有形文化の急速な流入が目立った。

頭の切り換えも「ザンギリ頭をたたいて見れば文明開化の音がする」と歌われたように、まず髪型を変えることから始まっている。しかし実質が急に新しくなったわけではなく、文字通りその「音がする」だけだったといつてよい。

断髪、剃刀、洋服の採用などの服装の改革をはじめ、食生活では肉食が奨励され、仮名垣魯文の『安愚楽鍋』(明治4〜5年刊)に描かれたように、牛鍋屋が大いに繁昌した。建築の分野では、新建材の煉瓦が使われ、不燃都市化の第一着手として、関様盆子せまごしの『銀街小誌』(明治15年刊)に詳述された銀座煉瓦街が出現している。

この時期の新語には「ドンタタ」(zondag)「ステッキ」(stick)などの外来語、「新聞紙」(news papers)「血税」(impôt du sang)といった直訳による漢語が多かった。

それらは主に知識層や学生によって使われたが、漢語の流行は、

明治元年ごろ京都の芸妓が「霖雨に盆池の金魚が脱走し、火鉢が因循して居る」などというまでになっている(石井研堂『増訂明治事物起原』昭和19年刊)。ベストセラーになった服部誠一の『東京新繁昌記』(明治7〜9年刊)が漢文体だったのも、そうした時流に合致していた。

この時期の新語に見られる特徴は、定着するまでにかんがりの揺れ動きを示している点であろう。たとえば、telegraph が「テレグラフ」「テリグラフ」「はりがねだより」「伝信」を経て「電信」に落ちつくまで、police が「ポリス」「巡邏」「邏卒」から「巡查」と定められるまでの経緯は、その好例といつてよい。「袖時計」「袂時計」から「懐中時計」へ、「摺付木」「早付木」から「燐寸」への推移にも、かなりの時間がかかっている。

「御一新」ということが消えて「維新」だけになり、「東京」という呼称が「東京」一つにしばられていった過程には、明治十年以後に安定を見た政局や世情が反映しているともいえるであろう。

2

西郷隆盛の分身が見える奇星として「西郷星」が話題を呼んだ明治十年の西南戦争がすむと、十一年五月に新政府の中心人物大久保利通が「暗殺」された。藩閥政府の「圧制」に抗する「壮士」たちの自由民権運動が「演説」(福沢諭吉の訳語とされる)とともにさかんになった状況は、末広鉄腸の『雪中梅』(明治19年刊)などでもうかがえる。

明治十四年の政変で、十年後の「国会」開設は約束されたが、明治十五年四月に刺客に襲われた自由党総理板垣退助の名文句「板垣

死すとも自由は死せず」(板垣自身のことばでないとする説が有力)によって「民権熱」はますます高まった。

第一次西洋志向期の後半に当たる明治十年代では、それまでの有形文化の皮相な移植から、内面的な思想・學術の摂取に努力が払われている。明六社のメンバーによる啓蒙活動をはじめ、翻訳小説や政治小説の盛行がその動きを促進させた。

「内地雑居」をめぐる論議をまき起こした条約改正問題を解決させるために、明治十六年に洋式の大社交場として建てられた鹿鳴館では「ワルツ」(Waltz)を踊る舞踏会が、毎夜のように開かれている。

「鹿鳴館時代」と呼ばれた風潮は、欧化を目ざす「演劇改良」「風俗改良」など、さまざまな「改良」運動を誘発した。「文学改良」の先鞭をつけたのは、坪内逍遙の文学論『小説神髓』(明治18〜19年刊)で、その実践作『当世書生気質』(明治18〜19年刊)には、英語の多い「手紙の中にエムを三円半だけ包みこんで……」とか、漢語的表現の「おもったより廉だったヨ」など、当時の書生言葉が活写されている。

逍遙の示唆を受けて二葉亭四迷が、「速記法」で活字化された三遊亭円朝の人情噺の語り口をヒントに創出した言文一致体は、幕末の漢字廃止論に始まる「國語改良」の一つの達成点を示すものであった。

二葉亭の口語訳「あひびき」(明治21年発表)がすぐれているのは、外国語や外来語の多用とちがって、欧文脈を日本語の文章に無理なく溶け込ませた点にあったといつてよい。

明治二十二年二月の帝国憲法発布、二十三年十一月の帝国議會開会によって、帝国大学、帝国生命、帝国工業など「帝国」という名の流行に拍車がかかった。明治二十年代に入って、鹿鳴館時代をピークとする欧化熱や改良熱に対するリアクションから、復古的な傾向が強まってきた。第一次伝統志向期とみるべきゆえんである。

山田美妙の小説「蝴蝶」(明治22年作)の挿絵(渡辺省亭画)が「裸体画」だったときは、賛否両論がかまびすしかった。それが明治二十八年の第四回内国勸業博覧会に、黒田清輝の裸体画「朝妝」が出品されると、批判的な論調の方が強くなっている。

また、進歩的なフランス民法を範とした民法草案は、明治二十六年に施行が予定されていたが、君権絶対主義学説の帝大教授穂積八束が延期論を主張した。「民法出でて忠孝亡ぶ」のスローガンが延期派を勝利に導いたのも、伝統志向の時流が与って力あったであろう。

第一次西洋志向期に創出された言文一致体も、明治二十年代になってからは発展を見なかった。むしろ逆に、西鶴の再評価による元禄文学復活の機運によって、尾崎紅葉、幸田露伴、樋口一葉らが、雅俗折衷の新文語体を駆使して多くの名作を書いている。

次の明治三十年代初頭にさかんになるロマン主義文学を準備したのは北村透谷、島崎藤村らの『文学界』同人だったが、その評論も漢語を多用した文語体であった。この時期における言文一致運動は不振だったといつてよい。

新語が作られても、外国語や外来語は少なかった。たとえば「倶楽部」のように、原語の Club に意味の通じる漢字を当てて、一見外国語でないように仕立てたケースもある。明治二十八年四月の三国干渉に際しては、中国の故事成句「臥薪嘗胆」がリバイバルして流行語となる時代であった。

4

日清戦争が終わってから日露戦争までの十年間は、軍備増強によって対外進出がはかられた。同時に、国内における資本主義の発展は、公害の原点とされる足尾銅山の「鉍毒」問題を起こし、労働争議の頻発をもたらしている。

明治三十三年から、自由廃業略して「自廢」と呼ばれた救世軍首唱の廃娼運動がさかんになった。「東雲しのぼのストライキ」の「ストライキ節」が全国的に流行したのも、そうした機運と無縁ではなかったであろう。

学術・文化の分野では、欧米の水準に近づこうとする努力が真剣につづけられた。欧化熱に対するリアクションを生じた明治二十年代も、後半からは再び西欧の新しい思想や文芸を熱心に吸収する明治三十年代の第二次西洋志向期への胎動を見せる。『文学界』のロマン主義運動は、その一つの現われであった。

島崎藤村の詩集『若菜集』(明治30年刊)、与謝野晶子の歌集『みだれ髪』(明治34年刊)は、明治ロマンチズムの輝かしいメルクマールというべきであろう。

そうした動きは、日露戦争前後の自然主義、社会主義の文学と無関係ではない。この時期には藤村のように、ロマン主義の詩人から

自然主義の小説家へ変貌することも可能だったのである。

明治二十年代には一時停滞していた言文一致の文体も、『ホトトギス』派の写生文と自然主義文学運動によって、明治三十年代後半に確立された。女学生言葉「よくってよ」が頻発する「ヨクテヨ小説」もこの時期に流行している。

小説に言文一致体が採用されたパーセンテージは、明治三十八年度が七八%、三十九年度が九一%、四十年度が九八%だったという（山本正秀「開化期の文体をめぐって」昭和39年）。近代文章史上きわめて重要な時期だったといつてよい。

5

日露戦争が終わってから、直接行動派が議会議策派より強くなった社会主義運動に対して、政府はきびしい弾圧を加えた。大逆事件では、明治四十三年六月に検挙された幸徳秋水ら無政府主義者が「逆徒」として処刑されている。明治末期から大正初年にかけての第二次伝統志向期は、労働運動史上のいわゆる「冬の時代」と重なっていた。

日露戦争の直後に、島崎藤村の「破戒」（明治39年作）、田山花袋の「蒲団」（明治40年作）が発表されてさかんになった自然主義文学は、しばしば「モデル問題」を起こしている。

「出歯」という流行語を生んだ明治四十一年三月の出歯亀事件（大久保の植木職池田亀太郎が湯帰りの婦人を暴行したのち殺したとされる）と結びつけられたり、自然主義即「耽溺」（小栗風葉と岩野泡鳴の二人が同名の小説を書いた）主義とされたりして、発禁処分を受けた作品も少なくない。

明治二十年代の第一次伝統志向期は、欧化熱に対する反発から、西洋体験を持たない人々が復古主義や国粹主義を唱えた。しかし第二次伝統志向期においては、森鷗外や永井荷風ら洋行帰りの保守主義者が、西欧近代を模して及ばない当時の日本の現状を批判し、反自然主義の立場から、江戸時代のモラルや美意識に強い関心を示している。

明治四十四年九月創刊の『青鞥』で「元始女性は太陽であった」と宣言した平塚らいてう（明子）らに対しても、ジャーナリズムが付けた「新しい女」というレッテルには、マイナス・イメージがともなっていた。

大ヒットしたフランスの悪漢映画「ジゴマ」が、社会的弊害を考慮した警視庁によって大正元年に上映禁止とされたり、大正三年に発売された松井須磨子の「カチューシャかわいや」のレコードが、教育界や宗教界で問題化したのも、当時の風潮を示しているといつてよい。

明治三十七年に小学校の国語教科書が国定となって以来、標準語が全国的に浸透していったこの時期には、外来語が急増する大正中期をひかえて、新旧の用語が大きく交替しつつあったとみるべきであらう。

6

大正三年七月の第一次世界大戦勃発の前後から、大正デモクラシーの気運が高まった。大正五年から吉野作造が首唱した「民本主義」（茅原華山の造語という）は、その有力な指導理論だったといえる。

大戦末期の大正六年十一月にロシアで革命政権が生まれたことは、わが国の社会主義勢力や労働運動に大きな影響を与えた。

大正八年四月創刊の総合雑誌名となった「改造」を合い言葉に、「普選」実現への動きは強まり「プロレタリア」階級の台頭が目ざましくなった。政府の「赤化」対策も、そのきびしさを増してゆく。大戦後の大正七年にシベリア出兵を強行した「非立憲首相」寺内正毅（頭の形がマスケット人形ビリケンに似ていた）は、米騒動の責任をとって退陣した。同年九月「平民宰相」原敬が、あとを受けてわが国最初の本格的政党内閣を発足させたが、十年十一月に右翼青年によって暗殺されている。

明治末期から大正初年にかけての反自然主義のなかでも、新しい西欧思想の同時代的影響を受けて、ヒューマニズムと個性尊重を理想とする『白樺』の作家たちが、大正前半の文壇をリードした。それは大正十二年九月の「震災」以後、昭和初年にかけてのプロレタリア文学へと発展してゆく。この時期は第三次西洋志向期とみるべきであろう。

そのことは、外来語の急激な増加現象にも現われている。明治時代には気取った感じを与えた外来語が、大正時代には普通の日常語と受けとられる傾向が強くなった（榎垣実『日本外来語の研究』昭和38年刊）。

震災後の「復興」機運とともに「乗合自動車」のような新しい交通機関が誕生し、大正十四年七月には、JOAKの本放送で「ラジオ」という電波メディアがスタートした。大正十五年十二月配本開始の改造社『現代日本文学全集』がもたらした「円本」ブームが、活字メディアの活性化をもたらしたことも無視するわけにはゆかない。

い。

おわりに

明治大正の新語・流行語・風俗語を、その素材と造語法という視点からまとめて、結びとしたい。

新語が生まれるとき、全く新しい素材で作られるケースはあまり多くないといえる。たとえば、正午を知らせる午砲の音から出た「ドン」、シンシンシンタカタッタ……の響きを生かした楽隊の「シンタ」などは擬声語的表現による新語であった。

また、明治二十年に大流行したコックリと動く降霊術の「コックリさん」、ブランと首をくくる「ブランコ」などは擬態語的表現といつてよい。明治十年ごろの「オヤマカチャンリン」、二十四年ごろの「オッペケベ、オッペケベッポ、ベッポッポー」など、意味不明ながらフィーリングはわかる流行歌の「唯し言葉」は、感覚語的表現とみるべきであろう。

しかし、新語・流行語の大部分は、在来の素材を供給源としている。その作られ方、使われ方を（A）借用、（B）合成、（C）省略、（D）転化の四つに分けて考えてみよう。

（A）借用——外国語から借用した新語は非常に多く、発音や意味が多少変わっても原語のままの外来語、和語または漢語に翻訳された訳語の二つに分けられる。

たとえば、オランダ語 *dronken*（飲む）から出た「ドロンケン」、フランス語 *partisan*（党員）から転化した「バルチザン」、ドイツ語 *Lunpen*（古着）からの「ルンペン」などは、それぞれ発音や意味が変化した外来語だが、英語からのものももっと多いことは

いうまでもない。

なかには「倶楽部」(Club)や「型録」(Catalogue)のように、意味のぴったり合った漢字をあてて、日本語と錯覚させかねないケースもある。

欧米語が漢語に訳された新語は「富国強兵」「自由平等」といった四字漢語が、明治初年において特に目立つ。フランス語から直訳された漢語「血税」は、単に兵役を意味するだけだったものが生き血を取られるという誤解を招いた。

三国干渉に際しての「臥薪嘗胆」をはじめ、大正七年に朝日新聞社筆禍事件の原因となった「白虹日を貫く」(不吉の前兆を意味するこの語が安寧秩序を乱すとされた)などは、中国古典の故事成句が新しい意味をもって蘇ったものといつてよい。

外国語や古典語ばかりでなく、方言から流行語が生まれたケースもあった。「塩原多助」の「がんす」などはその一例であろう。

(B) 合成——和語・漢語を新たに合成した新語は「文明開化」「活動写真」など、もともと多くみられるものだが、外国語と日本語の合成も、土曜日の「半ドン」、不見転でオーライ(all right)する「応来芸者」などがあげられる。

(C) 省略——新語や流行語は、省略して使われるケースが少なくない。「円本」は一本本の上部省略だが、デモンストレーション(demonstration)の「デモ」、ストライキ(strike)の「スト」のような下部省略の方が多い。

複合語の省略にも、活動写真の「活動」、円太郎馬車の「円太郎」のような下の単語の省略、自由廃業の「自廃」、普通選挙の「普選」のようなそれぞれの単語の下略がある。

(D) 転化——新語の転化では「出歯亀」から「出歯る」「サボタージュ」(sabotage)から「サボる」など、名詞の動詞化がもっとも多い。

ビリケン頭をもじって「非立憲首相」と呼んだケース、無銭飲食の意味の「ラジオ」が「無線電話」(radio)の初期の訳語)から生まれたケースなども、転化の例に入るであろう。

特定の個人によって作られた流行語としては、明治三十六年五月に日光華厳滝に身を投げた一高生藤村操の「人生不可解」、大正九年の議会で政府攻撃演説中に永井柳太郎が述べて問題になった「西にレーニン、東に原敬」などがあった。

個人以外の階層方言では「天賦人權」「民本主義」などの学術用語、「よくつてよ」「知らないわ」などの女学生用語、「直接行動」「同盟罷工」などの労働運動用語のほか、「今日は帝劇明日は三越」といった広告のキャッチ・フレーズがあげられる。

これらの世相を示す新語・流行語・風俗語は、明治時代にはもっぱら新聞・雑誌などを通して、あるいは演芸・音曲・流行歌によって拡まったとみてよい。それに大正の初期からは活動写真(映画)、末期にはラジオ(放送)も加わった。

昭和初年以後は、急激に発達したマス・メディアが拡め手となって、新語・流行語が送り出される量とスピードは増大した。しかし、その素材や造語法は明治大正時代とさして変わらないまま、現代にまで及んでいるといえるのである。